

作家解説

我妻英策 あづま・えいさく 1925-2003

現在の栃木県日光市に生まれる。1951年栃木二紀会を結成。1958年東北大学を中退。日光市在住の画家達によるグループ青光会に参加。1959年二紀展に入選。同年、小野崎草樹らとグループ陀を結成。銀座で発表を続ける。1960年代後半に結成された日光の絵画グループVOAに参加。1969年二紀会同人となる。

石川寒巖 いしかわ・かんがん 1890-1936
栃木県那須郡黒羽門町に生まれる。1909年に上京し、太平洋画会で洋画を、佐竹永郎に日本画を学ぶが、肺病にかかり1911年に帰郷。一時は精神を病むも、那須雲照寺の釈戒光について禅を修行、〈寒巖〉の道号を与えられ、画家として再起する。1918年、大田原の南画家・富山香邨の仲介で南画会に入り、本格的に南画を描きはじめる。1920年に再上京し、小室翠雲に師事。日本南画院に参加。1929年、小杉放菴らと華巖社を結成。1930年代には、放菴の提唱で始まった中国思想を研究する老荘会にも参加した。

今野啓司 いまげき・けいし 1893-1946

現在の千葉県長生郡長南町に生まれる。日本美術院研究所で学び、1915年に第1回日本美術院習作展と第1回草土社展に出品。1916年再興第3回院展で櫻牛賞を受賞。1917年の第3回日本美術院試作展では洋画部と日本画部の両方で奨励賞を受賞し、翌年院友となる。1922年春陽会創設にあたり、客員として参加した(1924年会員)。

入江 観 いりえ・かん 1935～

現在の栃木県日光市に生まれる。日光町立第一国民学校（現・市立日光小学校）と日光中学校で谷田貝憲介から油絵の手ほどきを受ける。東京藝術大学美術学部藝術学科在学中に加山四郎に学び、1956年第33回春陽会展に初入選。同年から春陽会研究所で岡鹿の助や三雲祥之助らの指導を受ける。1962年政府給費学生として渡仏。1964年帰国後、春陽会会員となり、現在まで同会で活躍している。

大山魯牛 おおやま・ろぎゅう 1902-1995

東京に生まれる。本名は龍一郎。生後間もなく栃木県足利へ転居。1919年に上京し、小室翠雲が主宰する環堵画塾で学び、はじめて（雅堂）と号して日本南画院や帝展を中心に作品を発表。1935年に〈魯牛〉へ改号。戦後は新撰美術院で活躍、1995年に93歳の生涯を閉じるまで、終生、南画と向き合い、南画を描き続けた。

岡田蘇水 おかだ・そすい 1880-1942

現在の栃木県佐野市に生まれる。本名は喜一郎。1900年に上京し、日本画家の佐竹永湖に師事する。1902年より日本美術協会や日本画会、日本南宗画会をはじめ、文展、帝展などに出品した。1929年に小杉放菴らと華巖社の立ち上げに参加する。

荻町芳雄 おぎまち・よしお 1928-2014

現在の栃木県日光市今市に生まれる。小野崎草樹に師事後、油彩画家となる。古河電気工業に勤めるかわら、宇都宮市在住の自由美術会員、田中彦次らと交流し研鑽に励む。1962年、自由美術展へ入選。日光市在住の画家たちによるグループ青光会、VOAでの活動を経て、1967年、今市市の油彩画愛好者を集め、グループ碧を結成。1980年にグループ石榴へ改名し、後進の指導にあたった。1987年から今市市で市民に絵画・写真を教える杉並木大学の講師となり、日光市と合併後も2008年3月まで指導を続けた。

小野崎草樹 おのざき・そうじゅ 1913-1988

栃木県塩谷町に生まれる。本名は正二。旧制大田原中学校を経て、1941年12月、東京美術学校日本画科を卒業。今市中学校、日光高等学校などで教壇に立つ。1950年、創造美術展入選。1951年、新制作協会日本画部入選（以後8回入選）。1960年代後半に結成された絵画グループVOAに参加。1975年、栃木県芸術祭美術展審査員を務め、以後招待出品となる。

笠木 實 かさぎ・みのる 1920-2018

群馬県桐生市に生まれる。14歳のときに第8回構造社展に油彩画を出品。小林萬吾主宰の同舟舎絵画研究所で学ぶ。15歳頃に西田武雄の日本エッチング研究所に通い、銅版画の制作も手がけた。1937年、東京美術学校油画科予科に入学。在学中、油彩画を制作する傍ら、日本版画協会展や日本エッチング作家協会展に出品を重ねる。戦時中の特例で、1941年12月に同校を繰り上げ卒業。戦後、日本版画協会（のちに退会）と春陽会展に出品を重ねる。1951年の第28回春陽会展にて、春陽会賞を受賞、1955年に同会絵画部会員に推挙された。

加山四郎 かやま・しろう 1900-1972

神奈川県横浜市に生まれる。1927年に東京美術学校西洋画科を卒業。この間、1926年に第4回春陽会展に初入選し、1928年の第6回同展で春陽会賞を受賞する。以後、晩年まで春陽会を主な活躍の場とした。1930～1933年にかけてフランス留学。帰国後は1934～1941年にかけて自由学園で美術を指導し、1938年に春陽会会員となる。1953年、東京藝術大学講師となり、1968年の定年退職まで後身の指導に力を注いだ。

栢澤 齊 からさわ・ひとし 1950～

栃木県日光市生まれ。1970年シロタ画廊で開催された日和崎専夫の個展で、木口木版画を知り、翌年、創形美術学校版画科に入学。日和崎から木口木版画を学ぶ。以後、黄楊や椿といった硬い木を輪切りにした面（木口）に、ペランと呼ばれる鋭尖な彫刻刀で細密な線を彫る木口木版は制作の原点となり、凝縮された空間に文学性溢れる作品を生み出し続けている。

川島理一郎 かわしま・りいちろう 1886-1971

栃木県足利生まれ。1890年東京に移住。1905年渡米。1908～1910年にかけて現地の美術学校やデザイン学校で学んだ後、1911年に渡仏、アカデミー・コロロッシなどに通った。1913年、サロン・ドートンヌに日本人として初入選。1919年に帰国するが、その後もしばしばヨーロッパを旅し、1922年にはサロン・ドートンヌ会員になっている。1926年、国画創作協会第二部の創立に同人として参加。1938年から翌年にかけて、陸軍省嘱託として中国各地を訪ね、その風俗を描く。戦後は日本芸術院会員となり、日展で活躍した。

木村莊八 きむら・しょうはち 1893-1958

牛肉店いろはを経営する木村莊平の第八子として、東京に生まれる。白馬会美術洋画研究所で知り合った岸田劉生らとフェウザン会、草土社を結成。二科展や日本美術院洋画部にも出品した。1922年に発足した春陽会に客員として参加。翌年、会員に推挙され、以後は中心的な画家の一人となり、小杉放菴とも親しい友人関係を築いた。永井荷風の『溼東綺譚』、大佛次郎の『霧笛』など、多くの挿絵も手がける。1958年、演劇出版社から『東京繁昌記』が刊

行される直前に死去。翌年、本書の絵と文により、日本芸術院賞恩賜賞が贈られた。

小杉未醒／放菴　こすぎ・みせい／ほうあん 1881-1964

現在の栃木県日光市に生まれる。本名は国太郎。五百城文哉の内弟子となる。1899年小山正太郎主宰の不同舎で学ぶ。この頃（未醒）と号し、太平洋画会に参加。1904年日露戦争に記者として従軍。欧州留学から帰国した1913年、再興された日本美術院に同人として参加し洋画部を率引。1919年まで出品したのち、1920年洋画部同人らと連袂脱退。このメンバーを中心に1922年春陽会を結成し、以後、同会を主な発表の場とする。1923年から（放菴）の号を併用し始め、1933年末（放菴）へ改号し、制作は日本画が中心になっていく。1945年新潟県新赤倉の別荘に疎開し、この地で晩年を過ごす。

小林草悦　こばやし・そうえつ 1885-？

現在の栃木県日光市今市生まれ。本名は永二郎。1908年に東京美術学校西洋画科を卒業。教職に就きながら挿絵や漫画を手がけたが、1918年に萬朝報社へ転職。のち退職して画業に専念、平福百穂に師事して日本画へ転向した。1922年以降、中央美術展や再興院展で入選を重ね、1927年頃から〈草悦〉の号を用いる。一時、川端龍子にも学び青龍社展や帝展に出品するも、院展に復帰する。花鳥画を得意とした。1929年に小杉放菴らの華巖社に参加している。

斎藤 博之　さいとう・ひろゆき 1919-1987

洋画家、絵本作家。旧・満洲国奉天市（現・瀋陽市）生まれ。1943年9月、戦争により、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）西洋画科を繰り上げ卒業。1944年6月に応召。8月、比島方面軍へ転属、ルソン島の南部の小島カプルに配属される。敗戦後も、終戦を知らないまま敗残兵として山に潜伏し続け、年末に下山したところで捕囚となり、収容所生活を送る。1946年4月に復員後、東宝撮影所の動画部門に勤務。1947年、帝国美術学校の再編により発足した造形美術学園の助手となる。1948年春、同学園が武蔵野美術学校に再編されるなかで、助手を辞職。以後、児童文学作品の挿絵や絵本なども手がけた。

清水比竜　しみず・ひあん 1883-1975

歌人。現在の岡山県高梁市生まれ。本名は秀（ひで）。1908年に京都帝国大学（現・京都大学）法学部を卒業。1927年に古河電気工業会社に就職後、1928年に日光精錬所に転勤。1929年に歌誌『二荒』を創刊、主宰となる。1930年に日光町町長となり、日光の観光行政改革に尽力する。1935年（比竜）と号す。1939年に町長を辞任し、千葉県市川市に移住。歌誌『二荒』が友誌の『下野短歌』に合併、主宰となる。1958年に日光市名誉市民。1968年、地方の歌誌であった『下野短歌』を、全国的な歌誌『窓日』へ発展させ、その主宰となる。絵の周りに自詠の短歌を書いた、歌・書・画が三位一体となった奔放な作品で多くのファンを魅了し、「いま良寛」と称された。

鈴木 淳　すずき・あつし 1892-1958

佐賀県に生まれる。東京美術学校西洋画科在学中の1914年、文展に初入選。1917年には〈秋近し〉が入選し、宮内省の買い上げとなった。友人・清水良雄の紹介で、鈴木三重吉と会い、児童雑誌『赤い鳥』に童画を描き、同誌の主要な童画家となる。

鶴見守雄　つるみ・もりお 1891-1978

最高裁判事である鶴見守義の長男として生まれる。本籍は日光市相生町にあったが、日光で生まれたかは不明。1916年に東京美術学校西洋画科を卒業後、数年間ニューカレドニアで暮らす。1925年にフランスへ渡り、主に肖像画を描きながらパリで活動。1941年、第二次世界大戦の影響により帰国する。1943年、陸軍軍人で日光町長をつとめた鶴見直信（守雄の従兄弟）の娘と結婚。以後は東京を拠点とし、新樹神社を中心に活動した。

中村直人　なかむら・なおんど 1905-1981

現在の長野県上田市に生まれる。本名は直人（なおと）。1920年、山本鼎の世話で木彫家・吉田白嶺が主宰する木心舎に内弟子として入門、木彫を学び、この頃、小杉放菴からデッサンの指導も受ける。1926年、再興院展彫刻部に初入選。以後、1952年まで同会で彫刻を発表（1936年、同人）。1952～64年にかけて渡仏。当地では、絵画制作が中心となり、グワッシュを用いた独特な技法・画風によって注目され、パリのメディアにも大きくとりあげられた。帰国後は、二科会を主な舞台に、画家として活躍した。

野見山峻治　のみやま・ぎょうじ 1920-2023

現在の福岡県東海市に生まれる。1938年に上京し、同舟舎洋画研究所に通う。同年東京美術学校に入学。1948年自由美術家協会展で受賞。1952年渡仏。1958年第2回安井賞を受賞す。東洋画への新たな興味を感じて1964年帰国。1968年から1981年まで東京藝術大学で教鞭をとる。1992年芸術選奨文部大臣賞受賞、1994年福岡県文化賞、1996年毎日芸術賞、2000年文化功労者に選ばれ、2014年文化勲章受章。

二木直巳　ふたき・なおみ 1953～

東京生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科で学び、1977年中退。1979～1982年は計画技術研究所に勤務し、都市計画に関わる調査・編集・出版に従事した。1980年代から個展を中心に作品発表を始め、1986年頃より、鉛筆や色鉛筆による線を集積させた「Belvedere（見晴らし台）」シリーズを展開。1989年にはフィレンツェに滞在し、制作活動を深めた。

古橋茂明　ふるはし・よしろう 1924-2006

現在の日光市に生まれる。谷田貝憲介を中心とした日光在住の画家達による絵画グループ青光会に、小野昌太郎・船越蓮仁・我妻英策らとともに参加。日光を代表する水彩画家として、旺亥会を中心に活躍した。

水谷 清　みずたに・きよし 1902-1977

岐阜県郡上郡生まれ。小杉放菴に師事しながら川端画学校でも学ぶ。のち、放菴の娘・百合子と結婚。1926年第4回春陽会に〈裸女群像〉他一点で初入選し、以後、主に同会を舞台に活躍する（1933年会員）。1936年、同志と芸芸日本協会を創立し機関誌『文芸日本』を刊行。1956～1967年にかけて金沢大学教授、1959年から早稲田大学講師もつとめた。

吉田白嶺　よしだ・はくれい 1871-1942

現在の東京都墨田区に生まれる。本名は利兵衛。東京彫工会や日英博覧会で受賞を重ね、1910～1913年にかけて日本彫刻会に参加（1917年脱会）。この頃から木彫を手がける。1911年田端に転居し、隣に住む小杉放菴と交友。1914年再興第1回院展に出品し、同人に推挙。以後、同展・彫刻館に出品。1919年アトリエがあった日暮里渡辺町に住居を新築し転居。別号〈木心〉を冠した彫刻塾・木心舎を設立。同年山本鼎が長野県に開設した農民美術練習所の顧問となる。1926年自由学園高等科に新設された美術部で手芸としての木彫指導にあたった。

小杉放菴と昭和の画家たち

2026.4.29〔水・昭和の日〕–6.28〔日〕

※本目録の掲載順番は、必ずしも実際の展示順とは一致しません。

ごあいさつ	
2026（令和8）年は、昭和元年が始まった1926年から起算して「昭和100周年」を迎える年となります。昭和は、日本にとって激動の時代でした。戦争と復興、高度経済成長、価値観の大きな転換を経て、人々の暮らしや精神のあり方は大きく変化しました。 <p>本展では、この昭和100年という節目をふまえ、小杉放菴を中心に、昭和という時代を生きた画家たちの表現にあらためて光をあてます。1881（明治14）年に日光で生を受け、1964（昭和39）年に82年の生涯を閉じた小杉放菴の後半生は、昭和とともに歩んだものでした。洋画・日本画の世界で、東洋的精神性に根ざした独自の境地を開いた放菴の姿は、東西の文化が激しく交錯した昭和という時代の一つの象徴ともいえます。その姿勢は、昭和を生きた多くの画家たちと響き合い、ときに交差しながら、日本美術の豊かな地層を形づかってきました。</p> <p>昭和という時代を振り返ることは、単純に懐かしさや記憶を共有するのみにとどまらず、現代を生きる私たちが、過去の時間とどう向き合っていくのかを問いかけるものになるのではないのでしょうか。本展を通して、作品一つひとつに込められた画家たちの想いや時代へのまなざしを感じとっていただくとともに、昭和という時代が、多彩な声と表現の積み重ねと共にあったことを再発見していただけたら幸いです。</p>	
令和8年4月	
小杉放菴記念日光美術館	

〈未醒〉から〈放庵〉、〈放菴〉へ

大正から昭和への改元は、ちょうど小杉放菴が青年時代より名乗っていた雅号〈未醒〉から、〈放庵〉を併用するようになった時期と重なります。〈放庵〉号の正確な意味はわかっていませんが、画壇のしがらみから解き放たれて、自由に絵を描いていきたいとの願いが込められていたのではないのでしょうか。じき完全に〈放庵〉へ改号、1933（昭和8）年末にはさらに〈放菴〉と改め、昭和という時代を画家小杉放菴として生きたのでした。

01020007

小杉未醒（放菴）《泉》

1925（大正14）年頃　カンヴァス／油彩　179.0×363.0cm　平成4年度寄贈

01010022

小杉未醒（放菴）《水村長夏》

1927（昭和2）年　絹本墨画淡彩、軸装　140.5×41.3cm　平成6年度購入

01010032

小杉放庵《春風有詩》

1928（昭和3）年　絹本着色、軸装　125.0×37.0cm　平成7年度購入

2022a-03

小杉放庵《闘球図》

1930（昭和5）年頃　紙本墨画淡彩、軸装　39.8×29.0cm　令和4年度寄託

01010194

小杉放菴《良寛図》

1940年代　紙本着色、額装　38.6×44.4cm　令和2年度寄贈

画賛釈文：手まりうた　良寛も出　遊ぶべき　田圃の春と　なりにつけるかな

画賛現代語訳：手まりう歌　良寛までも外へ出て遊びたくなるような　田んぼの春になったのだなあ

01010205

小杉放菴《栗塵秘抄》

1950年代　紙本着色、額装　45.0×41.5cm　令和6年度寄贈

画賛釈文：あそびをせんとやうまれけん　たはわれせんとやうまれけん　あそぶ子供の声聞けばわが心さへゆるがるれ　栗塵秘抄

作品解説：『栗塵秘抄』は、平安時代末期に後白河法皇が編纂したと伝わる、庶民から貴族まで幅広く親しまれていた歌謡が集成された歌集です。小杉放菴が引用しているのは、とくによく知られた歌ですが、本来原文では〈わが身さへえこそゆるがるる〉であるはずの後半部分が、本作では〈わが心さへゆるがるれ〉となっています。これが単純に記憶で書いたために誤ったのか、意図的に変えたものなのかは判然としませんが、意味としてはどちらも「人は遊ぶために生まれてきたのか、戯れるために生まれてきたのか。遊んでいる子どもたちの声を聞いていると、私の心までもか揺り動かされてしまう」という意味になります。人間は本来楽しむために生まれてきたのではなかったかと、子どもたちの声にハッとさせられた戦後の放菴の感動が、本作には込められているのではないのでしょうか。

01010204

小杉放菴《伊勢物語》

1950年代　紙本着色、額装　30.5×37.5cm　令和6年度寄贈

画賛釈文：伊勢物語曰　つゝみづゝ井筒にかけしまろがたけ　過ぎにけらしも　いも見ざるまに

解説：『伊勢物語』は、平安時代初期から中期にかけて成立した、在原業平の恋愛をメインとする歌物語です。小杉放菴が引用しているのは、在原業平の作とされる歌で、正確には「筒井筒　筒筒にかけしまろがたけ　過ぎにけらしな　妹見ざるまに」を原文とし、現代語訳は「井戸の枠で背比べをしていた私の背丈も、すっかり井戸より大きくなってしまった。あなたに会わないでいる間に」となります。幼なじみだった男女が成長して再会し、互いの想いを確かめあうこの場面を、男女をこけし人形で、井戸を花に見立てて表現した、何とも愛らしい作品です。

01010206

小杉放菴《漁翁有酒》

1960年代　紙本着色、額装　28.8×52.5cm　令和6年度寄贈

2022a-04

小杉放菴《二荒山》

1950-1960年代　紙本着色、軸装　32.0×35.0cm　令和4年度寄託

画賛釈文：八千矛のおほなもち神いままかも　しづまりたまふ　ふたあらの山

画賛現代語訳：八千矛の大国主の神は、今もなお静かにお鎮まりになっているのだろうか、二荒山（男体山）に

小杉放菴と華巖社

1929（昭和4）年、東京で活躍していた栃木県ゆかりの日本画家たちによって、華巖社という団体が結成されました。小杉放庵（放菴）、小堀脩吾、荒井寛方を筆頭に、岡田蘇水、関谷雲崖、福田浩湖、小林草悦、松本姿水、石川寒巖、武井晃陵、大貫鏡心（徹心）、河内舟人、荒木月畝、戸室臨泉、大山雅堂（魯牛）に、美術評論家の石川宰三郎が参加。活動としては、東京展と宇都宮展を1回ずつ開催しただけで終わってしまいました^が、栃木県を代表する近代の日本画家が集ったグループとして、栃木県美術史のなかで大きな存在感を残しました。本章では当館コレクションから、小杉、岡田、小林、石川、大山の、5作品をご紹介します。

個人蔵

小林草悦《春光》

1930（昭和5）年頃　絹本着色、軸装　119.5×35.5cm　特別出品

2013d-02

石川寒巖《山水図》

1930（昭和5）年頃　紙本着色、軸装　139.4×30.4cm　平成25年度寄託

01010014

小杉放庵《水亭》

1932（昭和7）年　三越本店第1回個展　紙本墨画淡彩、軸装　59.8×64.8cm　平成6年度購入

2013d-08

岡田蘇水《溪山積雪図》

昭和初期　絹本着色、軸装　126.0×41.5cm　平成25年度寄託

01010190

大山魯牛《竹林図》

1930年代後半　紙本着色、軸装　133.9×58.6cm　平成30年度寄贈

戦前と戦中と

1928（昭和3）年の済南事件、1931（昭和6）年の満洲事変、1937（昭和12）年に開戦した日中戦争、1941（昭和16）年に開戦した太平洋戦争。日本にとって昭和は紛争・戦争の時代でもありました。画家たちは、この時代をどう生き、どのように表現したのか。本章では、当館のコレクションから、戦前・戦中の昭和の美術を振り返ります。

資料

小杉放菴日記

1926（大正15）年10月-1928（昭和3）年5月　20.8×16.8cm　平成13年度寄贈

解説：1926年12月25日、大正天皇の崩御に伴い、皇太子裕仁親王が皇位を継承したことで、元号「大正」は即日「昭和」へと改元されました。この日を、小杉放菴はどんな風に迎えていたのでしょうか。そのときの日記を見てみましょう。〈12月25日　百第二十三代大正天皇崩じ給ふ　終日絵事を休み　夕方外出〉〈12月26日　年号は二十五日より昭和元年となりたり（中略）終日絵事〉大正天皇崩御の日だけは、絵の制作を止めて喪に服しており、愛国心が強かった当時の国民性がうかがえます。

2012a-13

吉田白嶺《若衆》

1927（昭和2）年　木／着色　20.9×19.8×44.1cm　平成24年度寄託

解説：吉田白嶺は日本美術院で活躍した木彫家で、小杉放菴とは何度も二人展を開催した友人でした。本作は、前髪を残した元服前の若衆を表した彩色木彫。大人と子どものはざまにあった若衆は、江戸の美意識のなかで特有の魅力を持ち、歌舞伎や浮世絵の題材としても好まれた存在でした。雑誌『アトリエ』1926（大正15）年12月号に、浮

世絵商人がこの《若衆》シリーズの頒布会をプロデュースした記録が確認されており、本作もその一点と考えられます。この企画が始まる3年前の1923（大正12）年に起きた関東大震災により、明治時代を経てなお残っていた江戸の痕跡がまぼ失われてしまいました。その結果、昭和初期に、記録・再評価・趣味として江戸時代を懐古する傾向が強まっていたのです。この頒布会も江戸懐古ブームの一つと位置づけられるでしょう。

- 2012a-15**
吉田白嶺《異教徒》
1933（昭和8）年　再興第20回院展
乾漆／着色　46.0×13.4×14.2cm　平成24年度寄託

- 01020020**
小杉放庵《厳島風景》
1933（昭和8）年　カンヴァス／油彩　71.0×89.0cm　平成11年度寄贈
解説:小杉放庵の日記から、友人であった広島県知事・湯澤三千男（栃木県鹿沼市出身）の依頼により、1933（昭和8）年5月に広島県の宮島（厳島）を取材して描かれたことがわかっています。日記には、平清盛が松を植えたと伝わる平松公園で写生したと記されています。ここには現在、平松茶屋という茶屋があり、このあたりから厳島神社、千畳閣、三重塔を見おろすと、絵とよく似た構図になります。昔よりも手前がうっそうとして見えにくくなっていますが、《厳島風景》にかなり近い構図です。現地の方の証言によれば、この絵の構図になるのは、この場所しか無いとのこと。もう少し高い地点からの眺めのようにも見えるのは、海の面積を眼で見えるより広く美しく描いた、放庵の工夫だったのかも知れません。

- 01020070**
木村荘八《歌妓支度》
1930（昭和15）年　第8回春陽会展
カンヴァス／油彩　150.0×180.5cm　平成26年度購入

- 01050008**
笠木實《村外れ》
1933（昭和8）年　紙／エッチング　17.7×23.8cm（イメージサイズ）令和5年度寄贈

- 01020019**
鶴見守雄《婦人肖像》
1933（昭和8）年　板／油彩　17.4×10.6cm　平成10年度寄贈

- 01020017**
鶴見守雄《婦人肖像》
1934（昭和9）年　板／油彩　17.4×10.6cm　平成10年度寄贈

- 01020018**
鶴見守雄《婦人肖像》
1935（昭和10）年　板／油彩　17.4×10.6cm　平成10年度寄贈

- 01020021**
鈴木淳《9月》
1934（昭和9）年　第15回帝展
カンヴァス／油彩　193.0×96.0cm　平成12年度寄贈

- 01020062**
中村直人《姑娘（クーニャン）》
1937-1938（昭和12-13）年頃　カンヴァスボード／油彩　15.6×20.0cm　平成21年度寄贈
解説:1937（昭和12）年7月の盧溝橋事件、続く8月の第二次上海事変の勃発によって日中戦争が拡大していくと、多くの美術家が戦地への従軍を志願しました。吉田白嶺に木彫を師事し、日本美術院で活躍していた中村直人もその一人でした。おそらく彫刻家としては、初めての従軍だったでしょう。この年10月、東京朝日新聞社の囀谷通信員として華北へ従軍、戦線をスケッチしてまわりました。現地で出会った若い中国人女性を描いた《姑娘（クーニャン）》は、この従軍中に描かれた小品です。翌年、従軍から帰還後、直人は従軍スケッチ展を開催し、好評を博します。直人は小杉放庵からデッサンを学んだことがあり、これを機として絵画制作にも自信をつけていくことになります。

- 2012a-8**
川島理一郎《卍字樓》
1938（昭和13）年　川島理一郎第5回個展〔1940年、資生堂ギャラリー〕
カンヴァス／油彩　50.9×60.9cm　平成24年度寄託
解説:1938（昭和13）年から翌年にかけて、川島理一郎は陸軍省囀託として、中国の北京、広東、大同を訪ね、写生を重ねました。《卍字樓》《緑陰の回廊》は、この従軍旅行中に、北京・頤和園内にある、清代の皇族たちが離宮として使用していた「聴鴻楼」の、美しい五彩の回廊を描いた作品です。従軍ではありましたが、川島はこの旅の目的は戦争画を描くことではなく、華北の〈自然美、人工美を描くこと〉にあったと語っています。〈人工美は過去に於けるその民族の仕事語るものであり、その自然美との関係に於て、民族性の母胎たるべき環境の真実が明確に指示されるものである〉からであり、このように自分が感じたままの中国を〈美術〉として日本人の前に示すことが、川島にとつての「戦争」を描くことだったのでした（川島理一郎「北支と南支の貌」龍星閣 1940）。

- 2012a-9**
川島理一郎《緑陰の回廊》
1938（昭和13）年　カンヴァス／油彩　50.4×60.5cm　平成24年度寄託
- 01020055**
今関啓司《断崖と海》
1941（昭和16）年　第19回春陽会展
カンヴァス／油彩　72.7×100.0cm　平成18年度寄贈

- 2017c-01**
小杉放庵《江南画冊》
1940（昭和15）年　紙本着色、画帖　各28.0×22.0cm　平成29年度寄託
解説:1940（昭和15）年4月、小杉放庵は華中鉄道株式会社（華中地域での軍事輸送を目的に設けられた国策鉄道会社）からの招きにより、石井鶴三・田中青坪と共に、日中戦争の戦跡を約1ヶ月間視察してまわりました。本作はこの時のスケッチを画帖にまとめたものです。華中鉄道は1939～1943（昭和14～18）年にかけて伊東深水や上村松園らも同様に招聘しており、いずれも〈その建設状態や風物を彩管を通して内外に紹介する為め〉のものであったといえます（『上海の文化』華中鉄道総裁室弘報室、1944）。本作は上・下・別冊の3冊組で、九首の短歌と67点のスケッチから構成され、少なくとも14点が、朝日新聞社と陸軍美術協会が主催する第2回聖戦美術展（1941年）に、《戦線スケッチ》として出品されたことが確認できます。日付を書き入れた現地写生が多く、「介石反日無明業火 燒尽空古今典籍」とある《商ム印書館》、「砲三度を驚く鳥に写す」とある《蕭山廟國寺》など、戦線が近い緊張感を漂わせる作品も見受けられます。

- 01040001**
小杉放庵《山翁奉仕》
1944（昭和19）年　軍事援護美術展　紙／コンテ　66.5×50.5cm　平成4年度管理換
解説:1944（昭和19）年に軍事保護院（厚生省の外局機関）指導のもと、戦時下の美術統制機関であった日本美術報国会主催で開催された軍事援護美術展の出品作です。この展覧会では、出品者に「軍人援護」という課題が出されました。これは主に傷痍軍人の援助を意味する、銃後の人々に課せられた運動を意味する言葉で、小杉放庵は〈軍人は人民を援すものなり援護さるとは弱いわけだ〉（木村荘八宛書簡、小杉放庵記念日光美術館蔵）と、この課題に難色を示しながらも、本作を描きました。《山翁奉仕》は、働き手が減った戦時下、老人であっても山仕事に出ている「勤勞奉仕」にかかった作品として理解されるでしょう。非売品として出品後すぐに、放庵の母校である日光第一国民学校（現・日光小学校）に寄贈されていますが、放庵が校長へ宛てた書簡には、最初から母校へ寄贈することを目的に本作を描いた旨が記述されていました。

戦後を生きる

1945（昭和20）年8月、日本は第二次世界大戦に敗戦しました。しかしこの終戦を知らないまま、戦地であった南洋諸島の山中を長いあいだ彷徨い続けた兵士がいました。兵士は復員後、画家斎藤博之として知られていくようになりますが、戦場体験を忘れることが出来ず、最晩年に《死の影の兵士たち》シリーズを病床で描きます。本章では戦争を体験した画家たちによる、戦後の作品をご紹介します。

- 01020003**
小杉放庵《浦島》
1947（昭和22）年頃　第42回春陽会展〔1965年〕小杉放庵遺作室
カンヴァス／油彩　96.0×66.8cm　平成4年度寄贈
解説:小杉放庵の1947（昭和22）年1月の日記に、未完成に終わってしまった本作に関する次の記述があります。1月7日《陰、雪時々　浦島像素描》、18日《仕事　浦島素描や成る》、22日《浦島　色にかかる　背を真黒に塗ること此度が始めてなれば心珍らしくおもしろくかゝる》、23日《浦嶋　バックの黒をぬいて指にて平にする》、24日《仕事　うらしまの顔など　歯のなき口元わからず　わが上歯なき口元今までのやがりて見たることなけれど　今日鏡にうつし見る　何と老いたることぞや》、28日《うらしま心に満たす》。戦争中、放庵は時局にあわせ、古事記等の日本神話を画題にした作品を多く手がけていました。〈心に満たす〉、結局未完成に終わってしまった《浦島》は、まるで敗戦を迎え、呆然としている放庵の自画像のようではないでしょうか。

- 01020086**
笠木實《一人》
1946（昭和21）年　第1回日展　カンヴァス／油彩　91.0×73.0cm　令和5年度寄贈
解説:着物業の女性像。人物をイスに座らせ、背景にエル・グレコの画集を配する構図は、東京美術学校（現・東京藝術大学）の先輩であった小磯良平の卒業制作《彼の休息》（1927年作、東京藝術大学蔵）を参考にしたものでしょう。1946年に開催された第1回日展は、戦前の官展である文部省美術展覧会（文展）や帝国美術院展覧会（帝展）の流れを受けつつ、戦後の民主化の中で再編された公募展として出発しました。国家主導から脱却し、美術団体主導の運営へ移行したことで、表現の自由と多様性が拡大し、日本美術界の再建と新たな出発を象徴する展覧会となったのです。この展覧会に笠木がこうした絵を出品したのは、いま一度学生時代にまで気持ちを取り戻し、画家として再起するためだったのではないのでしょうか。

- 00111ah0006**
中村直人《母子像》
1951（昭和26）年　再興第36回院展　木　48.5×10.1×12.0cm　平成21年度寄贈

- 0102sy0006**
斎藤博之《人間坐像（U）》
1956（昭和31）年　カンヴァス／油彩　72.7×60.6cm　平成19年度寄贈
解説:1944（昭和19）年に召集された斎藤博之は、フィリピンのマニラを経て、ルソン島南部の小島カブルに配属されました。敗走を繰り返す日々の中か、1945（昭和20）年8月の日本敗戦を知らないまま山中を彷徨。同年12月に山を下り、収容所生活の後、ようやく復員したのは、1946（昭和21）年4月のことでした。それから間もなくして斎藤が手がけたのが〈人間坐像〉シリーズです。インドシナ戦争、朝鮮戦争など、1950年代に入っても世界では戦争が続いていました。そんな争いが絶えることのない人間の生の苦悩が、このシリーズでは描かれています。

- 01010207**
小杉放庵《雀の宿》
1950年代　紙本着色、軸装　39.5×43.2cm　令和7年度寄贈

- 01010203**
小杉放庵《童話瘤取》
1950年代　紙本着色、額装　61.0×61.0cm　令和6年度寄贈

- 0103ak0001**
中村直人《パリの赤い家》
1953（昭和28）年　個展〔1964年、銀座松屋〕
紙／グワッシュ　65.0×80.0cm　平成21年度寄贈

- 0111ah0008**
中村直人《カルナバル》
1957（昭和32）年　9e Salon de la Jeune Sculpture〔パリ、ロダン美術館庭園〕
乾漆／着色　53.5×28.0×13.0cm　平成21年度寄贈

- 01010104**
小野崎草樹《日食》
1958（昭和33）年　第22回新制作協会展
紙本着色、額装　130.3×162.1cm　平成18年度寄贈

- 01020064**
荻町芳雄《胎動》
1960（昭和35）年　カンヴァス／油彩　65.2×53.0cm　平成24年度寄贈

- 01020096**
入江観《ドン・キホーテ》
1960（昭和35）年　カンヴァス／油彩　65.5×50.5cm　令和6年度寄贈

- 01020094**
我妻英策《ドイツあざみ》
1962（昭和37）年　カンヴァスボード／油彩　33.2×24.2cm　令和6年度寄贈

- 01010095**
清水比庵《老松》
1962（昭和37）年　紙本着色、軸装　113.0×34.2cm　平成13年度寄贈
画賛釈文:らんらん金色上る朝日かげ　今日もあまねく晴れわたりたり　比庵八十四
解説:絵の周りに自詠の短歌を書いた、歌・書・画が三位一体となった奔放な作品で多くのファンを魅了した清水比庵らしい作品です。《老松》は、数えて84歳の時の作。老いながらも、力強く、楽しげにうねる松の木は、まるで、人生まだまだこれからと筆をとり続けた比庵の自画像のようです。

- 01030103**
入江観《村の教会》
1963（昭和38）年　紙／鉛筆・水彩　45.0×36.3cm　令和7年度寄贈
解説:入江観のフランス留学中、28歳ときのスケッチです。サイン部分には、「Kan/6 Aout/ 63/Auvers sur Oise（カン／8月6日 1963年／オーヴェル＝シュル＝オワーズ）」とあり、フランスのヴァール＝ドワーズ県にある小村であることがわかります。ここは、フィンセント・ファン・ゴッホが最後の2ヶ月を過ごし1890年に自死した場所としてよく知られる村で、本作に描かれている教会もゴッホが《オーヴェルの教会》（1890年、オルセー美術館蔵）で描いた11世紀に建設されたノートルダム教会です。こうした西洋美術史の舞台を旅し、本場の美術を全身で吸収しようとしていた、若き画家の意欲がうかがえます。

- 01030071**
古橋義朗《赤い杉》
1960年代　紙／水彩　108.8×81.8cm　平成18年度寄贈

- 01010188**
大山魯牛《野》
1968（昭和43）年　第18回新興美術院展
紙本着色、額装　90.8×157.5cm　平成30年度寄贈

- 0102sy0016**
斎藤博之《ターリンの石畳》
1969（昭和44）年　カンヴァス／油彩　45.5×37.9cm　平成19年度寄贈

- 01020013**
水谷清《山郷》
1970（昭和45）年頃　第47回春陽会展
カンヴァス／油彩　72.8×91.0cm　平成8年度購入

- 01020072**
加山四郎《ノコギリ》
1971（昭和46）年　『朝日ジャーナル』1971年12月24日号表紙絵原画
油彩／カンヴァス　60.6×72.7cm　平成27年度寄贈

- 0104sy0001**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.1》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　27.4×48.6cm　平成19年度寄贈
解説:斎藤博之は最晩年、肺癌で入院中、ベッドの上で、決して忘れることの出来ない彷徨う兵士たちの姿を、何枚も何枚もベンで描き続けました。斎藤の没後に《死の影の兵士たち》と呼ばれることになるこのシリーズは、最期まで遠い戦地にとらわれたままだった、精神の痛ましさを感じさせます。

- 0104sy0007**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.7》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　27.4×48.6cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0008**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.8》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　27.4×48.6cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0009**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.9》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　27.4×48.6cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0018**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.20》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　32.6×43.0cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0021**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.23》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　42.8×32.6cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0022**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.24》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　32.0×41.0cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0024**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.26》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　41.0×32.0cm　平成19年度寄贈

- 0104sy0027**
斎藤博之《死の影の兵士たち No.30》
1985-1986（昭和60-61）年頃　紙／インク　41.0×32.0cm　平成19年度寄贈

新たな表現を求めて

本展最終章では、当館のコレクションの中から、具象と抽象を越えた野見山晁治、偉人のポートレートに木口木版の可能性を見出だした柄澤齊、立体的な絵画作品の二木直巳という、昭和の終盤に現れた、極めて独特な表現の画家たちをご紹介します。こののち、時代は平成へと変わっていき、彼らの表現もまた新たな方向へ変容していくことになります。

- 021050004**
柄澤齊《肖像IV アルチュール・ランボー》
1982（昭和57）年　紙／木口木版〔E.A.〕　19.5×14.6cm　平成9年度購入

- 021050007**
柄澤齊《肖像VII シャルル・ボードレール》
1983（昭和58）年　紙／木口木版〔E.A.〕　17.5×16.0cm　平成9年度購入

- 021050012**
柄澤齊《肖像XII 上田秋成》
1983（昭和58）年　紙／木口木版〔E.A.〕　25.0×12.3cm　平成9年度購入

- 021050016**
柄澤齊《肖像XVI マティアス・グリューネヴァルト》
1983（昭和58）年　紙／木口木版〔E.A.〕　9.9×16.9cm　平成9年度購入

- 021050024**
柄澤齊《肖像XXIV アルフレート・クービン》
1985（昭和60）年　紙／木口木版〔7/70〕　20.7×11.8cm　平成9年度購入

- 021050027**
柄澤齊《肖像XXVII オディロン・ルドン》
1985（昭和60）年　紙／木口木版〔E.A.〕　21.3×15.5cm　平成9年度購入

- 021050030**
柄澤齊《肖像XXX ミケランジェロ・ブオナローティ》
1985（昭和60）年　紙／木口木版〔E.A.〕　21.7×15.6cm　平成9年度購入

- 021050035**
柄澤齊《肖像XXXV 泉鏡花》
1985（昭和60）年　紙／木口木版〔64/70〕　9.5×15.0cm　平成9年度購入

- 01020085**
野見山晁治《海のものとも》
1983（昭和58）年　第6回六月の会展
カンヴァス／油彩　78.8×98.2cm　令和3年度寄贈

- 01000012**
二木直巳《ポロニウス 7904》
1979（昭和54）年　カンヴァス／水彩・色鉛筆　51.6×73.0cm　平成26年度寄贈

- 01000013**
二木直巳《パティオ 83A1》
1983（昭和58）年　カンヴァス／アクリル　60.3×90.0cm　平成26年度寄贈